令和４年度　研究活動のまとめ

１　研究テーマ

つなぐ・つながる造形教育
自信をもって、意欲的に表現活動に取り組む児童生徒の育成
児童生徒が安心して制作できる題材と授業展開

２　研究経過

第１回			第２回			第３回			第４回		
6/6	24人	滝尾小学校	8/2	御船中学校	県図工美術教育研究会 宇城・上益城大会 実践報告　作成	10/21	甲佐中学校	県図工美術教育研究会 宇城・上益城大会 実践報告　内容検討会	1/26	益城中学校	授業者　髙村　緑　教諭

３　研究の概要

(1) 研究の内容

今年度及び昨年度は「第６４回熊本県図画工作・美術教育研究会　宇城・上益城ブロック大会」に向けて宇城地区と合同で研究テーマに沿って研究を進めていった。そこで本年度は熊本県図画工作・美術教育研究会のテーマである「つなぐ・つながる造形教育」を設定した。研究大会では「つなぐ・つながる」の定義を次のように示している。

○「つなぐ」とは、教師が子どもと対象を結び付けて造形活動を設定すること
○「つながる」とは、その中で子どもが主体的に他者や他のものとのつながり、造形力を高め豊かな心を培っていくこと

とある。つなぐ・つながる造形教育を通して美術作品をはじめ教師と生徒、友だち同士、地域社会等のと「つながり」が深まることが期待されている。

また、「自信をもって、意欲的に表現活動に取り組む児童生徒の育成」「児童生徒が安心して制作できる題材と授業展開」に迫る研究の視点は以下の通りである。

1 児童生徒が自信を持って制作に取り組める題材の工夫
2 児童生徒が自信を持って制作に取り組める授業展開の工夫
3 自分の思いを表現できる、自由に言える人的環境や学習空間づくり

第４回研修では、上記の視点を取り入れながら授業が行われ、協働学習で意欲的に表現活動に臨む生徒の姿が見られた。提案された構想案について小中の先生方から意見をいただき、意見交換や小・中学校それぞれの立場では気がつかなかった新しい視点での授業づくりが検討されることにとても大きな意義を感じることができた。

(2) 成果と課題（○：成果　●：課題）

○本年度は、県図工美術研究会宇城・上益城大会に向けて更なる充実した図工・美術教育の推進のため、小学校、中学校における図工・美術教育研究について連携を深めることができた。
○県図工美術研究会宇城・上益城大会では宇城との合同発表であったため、表現活動や鑑賞活動において互いの地区の実践を学び合うことができた。
○授業では、ICT を活用しながら遠近法の学習を進め、自分がタブレットで撮った風景がどの遠近法に当てはまるのかを体験的に感じ、名画の作品の中にどのような遠近法が使われているのか新たな学びにつながっていた。

○研究協議ではＩＣＴの活用場面について、表現活動における手順の場面や評価場面での活用、鑑賞活動においては相互鑑賞での学びあいなど、互いの実践や意見を交換することができた。

●本年度は、実践報告作成のため、小学校図工の参観や実技研修ができなかった。次年度は校種間の学び合いや、教師自身が指導法やアイディアを学ぶ機会を設けていきたい。

4　実践事例

(1) 授業の概要

本授業はICTを活用しながら「遠近法」を学習し、遠近法の効果の活用から作者のねらいを感じ取り、生徒の興味・関心を高めるための多くの工夫がされた授業である。遠近法の種類や効果について学び、作品にどのようにいかされているのか、実際に写真を撮ってみたり名画の比較鑑賞を行ったりしながら作者のねらいや意図を読み取っていく。

(2) 学習構想案

中学校第２学年　美術科　学習構想案

期　日　令和５年１月２６日（木）第５校時
場　所　２年３組教室
指導者　教諭　髙村　緑

1　題材構想

題材名	「遠近法トリック」　（光村図書「あれ？どうなっているの」「美術Ⅱ」ｐ２０～２１）		
題材の目標	（１）形や遠近法を使ったトリックのアイデアを練り、表現を工夫して作品にあらわす。 （２）作品を鑑賞して、おもしろさや意外性を生み出す表現の工夫を感じ取る。		
題材の評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	①　形や遠近法を使ってアイデアを練り、表現を工夫して作品にあらわす。 ②　作品を鑑賞して、おもしろさや意外性を生み出す表現の工夫を感じ取る。	①　形や遠近法を活用したトリックを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。 ②　遠近法を使った作品の造形的なよさや美しさを感じ取り、おもしろさや意外性を生み出す表現の工夫について考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている。	①　美術の創造活動の喜びを味わい、主体的に形や遠近法を使ってアイデアを練り、工夫して作品にあらわす表現の学習活動に取り組もうとしている。 ②　美術の創造活動の喜びを味わい、主体的におもしろさや意外性を生み出す表現の工夫を感じ取る鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

題材終了時の生徒の姿
遠近法を用いた表現の構想を練る時に、遠近法が使われている効果について感じ取ったり、積極的にその後の制作の活動に生かそうとしたりする生徒。

題材の中心的な学習課題	本題材で働かせる見方・考え方
遠近法の種類や効果について学び、作品にどのように生かされているか考えよう。	造形的な視点を捉え感性や創造力を働かせ、遠近法の効果を生かしながら、作品を造り出したり作者のねらいや意図を読みとったりすること。

指導計画と評価計画（３時間取扱い　本時３／３）

過程	時間	学習活動	評価の観点等 ★は記録に残す評価の場面で「具体の評価規準」
知識	1	○コラージュを使って大きいものを小さく、小さいものを大きく感じる画像を作る。 ○消しゴムと教科書、または筆箱でトリック写真を作る。	【知①】（作品）【態①】（観察） ○小さいものを大きく、大きいもの小さく映す写真を遠近法の概念を理解しながら写真を撮っている。
知識発想	1	○遠近法について学ぶ。 ○校内を散策して遠近感を感じるところの写真を撮る。	【知②】（作品）【思①】（ロイロノート） ○遠近法の種類について学び、遠近法を活用して写真を撮っている。

鑑賞	1 (本時)	○前時で撮影した写真に使われている遠近法について考える。 ○レオナルド・ダ・ヴィンチ「最後の晩餐」と葛飾北斎の「富嶽三十六景神奈川沖浪裏」に使われている遠近法と、作者が遠近法を使った意図について考える。	★【思②】ﾜｰｸｼｰﾄ【態②】(観察) ○遠近法の効果の良さや作者がねらった意図について考えたり、感じ取ったりすることができている。

２　単元（題材）における指導計画と評価計画及び系統

学習指導要領における該当箇所(内容、指導事項等)

中学校学習指導要領「A 表現」ア（ア）、「B 鑑賞」ア（ア）イ（ア）（イ）、〔共通事項〕（１）アイ

教材・題材の価値

本題材は、身近な風景や場面などを深く見つめ、感じ取ったことや考えたことなどを基に、見る角度や距離、視点を変えるなどして主題を生み出し、撮影しながら主題に合わせて表現する活動である。他者の作品から遠近法がどのように効果的に使われているか考えたり、造形的な美しさを感じとったりするなどして、作者の心情や意図について考える見方や感じ方を深める。そういった点から、本題材では、カメラを活用し直感的に作品を生み出せる点を考慮し「技能」の指導及び評価を位置付けない題材とした。

本題材における系統（横軸を当該学年での他領域とのつながり、縦軸を他学年での同領域のつながり）

１年「見つめ、感じ取り、描く」
身近なものがもつ美しさやよさに関心をもち、身近なものを見つめ感じ取った特徴や、ものに託した自分の思いなどをもとに主題を生み出す。

２年「あれ？どうなっているの」
形や色のトリック、遠近法を使った作品に関心をもち、教室内や校内で撮影したら驚くこと、おもしろいことを考えることで主題を生み出す。

３年「風景に思いを重ねて」
心に残る風景を表わすことに関心をもち、思い出の風景に、自分の感じたことをどう重ねて表わすかを考えて主題を生み出す。

生徒の実態（題材の目標につながる学びの実態）

■本題材を学習するにあたって身につけておくべき基礎・基本の定着状況

調査内容	できる	まあまあ	あまり	できない
デッサンで学んだ構造や立体感について説明できる	7 人	19 人	8 人	3 人

■本題材の学習に関する意識の状況

調査内容	よく	まあまあ	あまり	ない
風景画を描くことは好きか。	10 人	13 人	8 人	6 人

調査内容	よく	まあまあ	あまり	ない
風景画を上手く描きたいと思うか。	26 人	8 人	2 人	1 人

■考察

（資質・能力に関して）

本題材を学ぶにあたり、基本的な立体感や構造について１年時の「見つめ、感じ取り、描く」のなかで、「体育館シューズのデッサン」を通して学んでいる。調査結果より、「構造や立体感を出すためにどのように表現すればいいのか説明できる」と答えた生徒が約７割を占めている。また、構造や立体感について理解している生徒の作品（体育館シューズのデッサン）は奥行きがあり立体的であるが、理解出来ていないと答えた生徒の作品は奥行き感がなく平面的であった。

（学びに関して）

本学級は、どの題材でも意欲的に活動する生徒が多い。今回遠近法を活用するので、風景画に着目して

アンケートをとった。その結果、「風景画を描くことが好き・まあまあ好き」と答えた生徒が約６割である。それに対して苦手だと感じている生徒は約４割である。苦手な生徒の意見の中で「自分が見ているものを描くのが苦手だから」という意見や「立体的に絵を描けないから」という理由が多く見られた。風景画を描くことを苦手とする意見が多いが、「上手く描きたいか」という質問に対しては肯定的に答える生徒が多かった。意見としては、「苦手だけどキレイに描けたら嬉しい」、「見たものをそのまま描けるようになりたいから」「立体的に描けたら嬉しいから」というものがみられ、自分の作品をよりよくしようとする思いや、技術の向上に向けて意欲的であることがうかがえる。このことから、次の題材で風景画を描くが今回学ぶ遠近法は非常に大切な題材となってくる。生徒の「意欲的に学びたい」、「上手くなりたい」という思いは非常に高く前向きである。

３　指導に当たっての留意点

○身近な生活の中にあるカメラを使って、日ごろから撮影している写真も撮り方を変えれば面白い作品が撮れることに気付かせる。
○遠近法の基本的な概念として「大きいものは近く、小さいものは遠くなる」ということを確認する。
○写真撮影を通して、感覚的に遠近法の概念をつかむだけでなく、自分でどのように撮ったのかを言葉にすることで、遠近法についてアウトプットして理解する。
○他の生徒が撮った作品や、画家の作品から遠近法をなかなか見つけられない生徒については生徒間交流の場面をつくって、生徒の言葉で説明し合うようにする。

４　板書型学習指導案（本時の学習）

（１）目標　作品どうしを比較する鑑賞活動を通して、遠近法の効果の活用から、作者のねらいを感じ取ることができる。

（２）展開

学習活動の流れ			
前時で撮った写真を比べて、どんな意図でどんな遠近法が使われているのか班で見比べ確認する。	「富嶽三十六景　神奈川沖浪裏」と「最後の晩餐」を比較してそれぞれ作者の意図を考察する。	全体で確認をする。	生徒の言葉でまとめを行う。 表現したい意図に合わせて遠近法を活用することができる。
学習過程における主な発問			
○どんな遠近法が使われていますか。	○２枚の絵を比較し、活用されている遠近法や作者の意図を探ろう。	板書をして確認する。	まとめ 今までの自分の作品や、これから作る作品にどう生かしていきたいか。

板書案

遠近法→近くのものは大きく､遠くのものは小さく

○線遠近法○色彩遠近法
○空気遠近法○消失遠近法
○斜投象法○曲線遠近法
○重畳遠近法○上下遠近法

めあて　使われている遠近法から、作者の意図を感じ取り、説明することができる

富嶽三十六景　神奈川沖浪裏	最後の晩餐
遠近法→波を大きく見せて迫力を出したい。 重畳遠近法→富士山のそばで荒波にもまれながら漁をしているシーンを見せたい。	線遠近法→真ん中にいる人に目線が行くようにしたい。 空気遠近法→広い部屋に見せたい。

まとめ

生徒の言葉でまとめる。遠近法についてこれから自分が活用したいことや、作者が意図的に使っていることで良さを感じている内容が書かれているとよい。